

平成 21 年漁期 イカナゴ新仔（シンコ）情報

平成 21 年 2 月 13 日
香川県水産試験場

1 気象・海象

(1) 水温（図 1）

今期の屋島湾（備讃瀬戸）の水温は、11 月に入り中旬までは平年値より 1℃程度高く推移し、11 月下旬から 12 月中旬までは平年値より 0.7℃程度低く推移した。その後上昇し、平年値より 1℃前後高く推移している。気象予報によれば四国の今後 1 ヶ月の気温は平年より高めで推移すると予測されており、今後も水温は平年値よりも高めで推移するものと思われる。

なお、イカナゴの産卵盛期の水温とされる 14～12℃になったのは、平成 20 年 12 月 7 日～平成 20 年 12 月 30 日で、平年（12 月 12 日頃～12 月 25 日頃）と比べ 5 日早く、10 日長かった。また、水温 13℃を割り込んだのは 12 月 26 日で平年よりも 7 日遅かった。

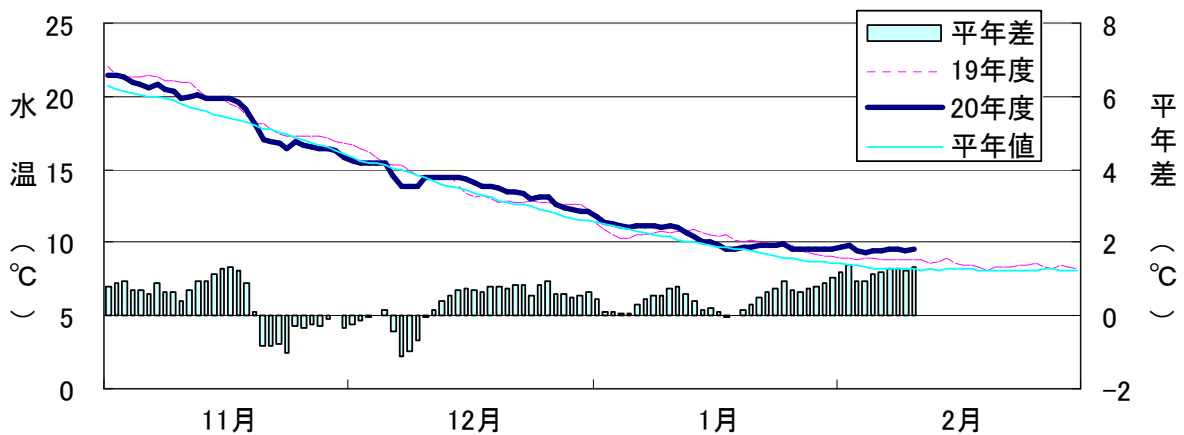


図1 水温の推移(屋島湾水深1m)

(2) 季節風（図 2）

季節風（特に西風成分）の強弱は、備讃瀬戸から播磨灘に運ばれるイカナゴ稚仔魚の量を左右し、風の強い方が分散が良く、生残が良くなる傾向がある。今年度 12 月の平均風速は上、中旬は平年を下回り、12 月下旬から 1 月中旬にかけて平年をやや上回ったが、1 月中旬以降は平年を下回って推移している。季節風について 12 月は平年に比べ弱く、1 月は平年並みであった。

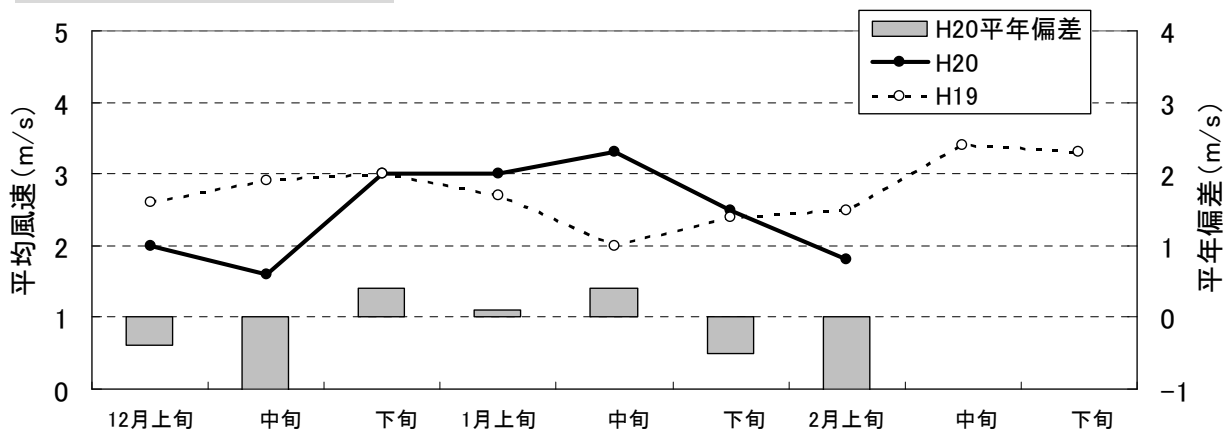


図2 平均風速の推移(高松地方気象台)

2 親魚調査

(1) 産卵期 (図 3)

本場調査船を使用し、空釣りこぎ漁具を3ノット3分間曳く方法で高松地区(2カ所)と庵治地区(3カ所)で2回ずつ親魚を採集した。採集したイカナゴ親魚の生殖腺熟度指数(GI(%)=生殖腺重量÷体重×100)の推移を図3に示した。雄、雌ともに、12月12日から25日の間に大きく低下した。

主な産卵は0才魚、1才魚以上ともに12月中旬に行われたと考えられる。

* 年齢の起算日は1月1日

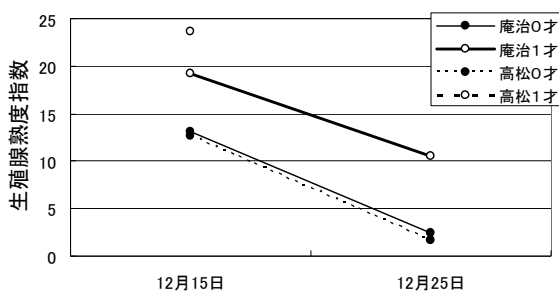


図3-1 生殖腺熟度指数の推移(雄)

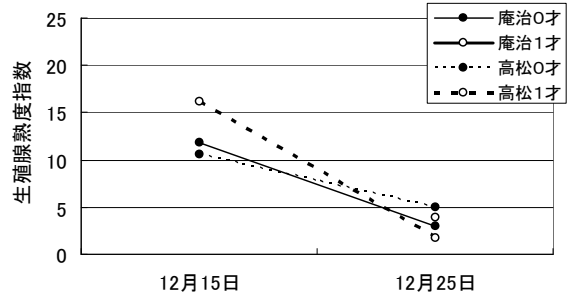


図3-2 生殖腺熟度指数の推移(雌)

(2) 産卵親魚の組成 (図 4)

全長測定の結果を図4に示した。平均全長は高松地区0才魚89mm, 1才魚123mm, 2才魚134mm, 庵治地区0才魚89mm, 1才魚122mm, 2才魚131mmだった。年齢別組成を見ると、0才魚が209尾(96%), 1才魚7尾(3%), 2才魚2尾(1%)と、殆どが0才魚であった。

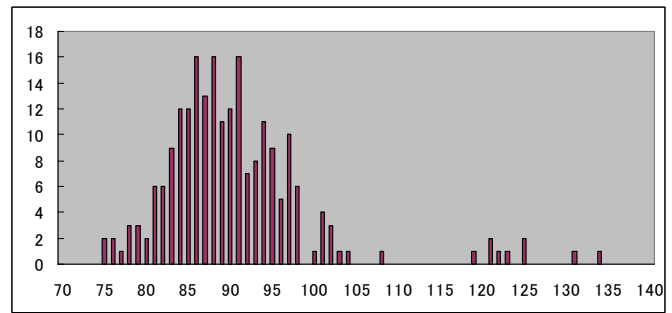


図4 イカナゴ親魚の全長組成

(3) 産卵量

高松地区では1月15日から、庵治地区2月7日から実施されている込網におけるイカナゴ親魚の漁獲状況や12月の5地点での親魚調査の採集尾数から見ると親魚数は少なく、産卵量も少ないと考えられる。

3 稚仔魚の出現状況 (図 5, 図 6, 図 7)

丸特Bネット(口径45cm)の鉛直曳きによるイカナゴ稚仔採集調査を、備讃瀬戸および播磨灘の23の調査地点で1月前半(8日, 9日), 1月後半(22日)および2月前半(2日, 3日)の3回実施した。調査地点毎の稚仔魚の採集尾数を図5, 採集尾数の経年推移を図6, 全長組成を図7に示した。

なお、備讃瀬戸および播磨灘の各々1調査地点は過去の蓄積データが少ないため、稚仔数の評価については、残り21調査地点(備讃瀬戸14点, 播磨灘7点)を対象に行った。

(1) 1月前半調査

備讃瀬戸での稚仔魚の採集数は33尾で、昨年(34尾), 過去10年平均(平成11~20年の10年間の平均78尾)より少なかった。採集された稚仔魚の平均全長は4.8mmであった(昨年5.2mm)。

播磨灘での稚仔魚の採集数は1尾で、昨年(26尾)および過去10年平均(18尾)より大幅に少なかった。採集された稚仔魚の全長は6.0mmであった(昨年平均全長6.2mm)。

稚仔魚は主に備讃瀬戸東部海域で採集された。

(2) 1月後半調査

備讃瀬戸での稚仔魚の採集数は4尾で、昨年(9尾)およびの過去10年平均(97尾)より少なかった。採集された稚仔魚の平均全長は4.8mmであった(昨年6.5mm)。

播磨灘での稚仔魚の採集数は5尾で、昨年(13尾)および過去10年平均(38尾)より

り少なかった。採集された稚仔魚の平均全長は 6.2mm であった（昨年 7.5 mm）。

稚仔魚は主に備讃瀬戸東部海域及び播磨灘海域で採集された。

(3) 2 月前半調査

備讃瀬戸での稚仔魚の採集数は 2 尾で、過去 10 年平均（12 尾）より少なかった。採集された稚仔魚の平均全長は 7.3mm であった（昨年は採集されなかった）。

播磨灘での稚仔魚の採集数は 1 尾で、昨年（5 尾）および過去 10 年平均（18 尾）より少なかった。採集された稚仔魚の全長は 5.7mm であった（昨年平均全長 9.6 mm）。

稚仔魚は主に備讃瀬戸東部海域で採集された。

3 回の調査の稚仔魚の採集数の合計は 46 尾（備讃瀬戸 39 尾，播磨灘 7 尾）で備讃瀬戸の方が多かった。昨年 87 尾（備讃瀬戸 43 尾，播磨灘 44 尾）及び過去 10 年平均 260 尾（備讃瀬戸 186 尾，播磨灘 74 尾）と比較すると備讃瀬戸，播磨灘ともに大幅に少なかった。

稚仔の全長組成と採集された海域を昨年と比較すると、昨年よりも全体にサイズが小さく、播磨灘での採集割合が低かったことから今期の稚仔魚の分散は昨年より悪かったことが推定される。

4 2 月上旬までのイカナゴ（親魚）の漁獲状況

高松 1 月 15 日から込網漁を開始した。1 月 30 日までの漁獲量は約 35.2 トン（延べ 57 隻），1 日 1 隻あたりの漁獲量は 0.6 トンと昨年同期と比べ約 2 倍である。

庵治 2 月 7 日から込網漁を開始したが、不漁のため殆どが休漁している。

5 シンコ漁について

親魚調査の結果より、親魚密度が低く、年齢組成については 1 尾当たりの産卵量が少ない 0 才魚が中心だったこと、今期の稚仔魚の採集数は昨年及び平年に比べて少ないことから産卵量は少ないものと思われる。稚仔の分散は平均風速が平年より弱かったことから平年より悪いと思われる。

以上のことから、今期のシンコ漁については、平年を下回る低調な漁模様で推移すると予想される。

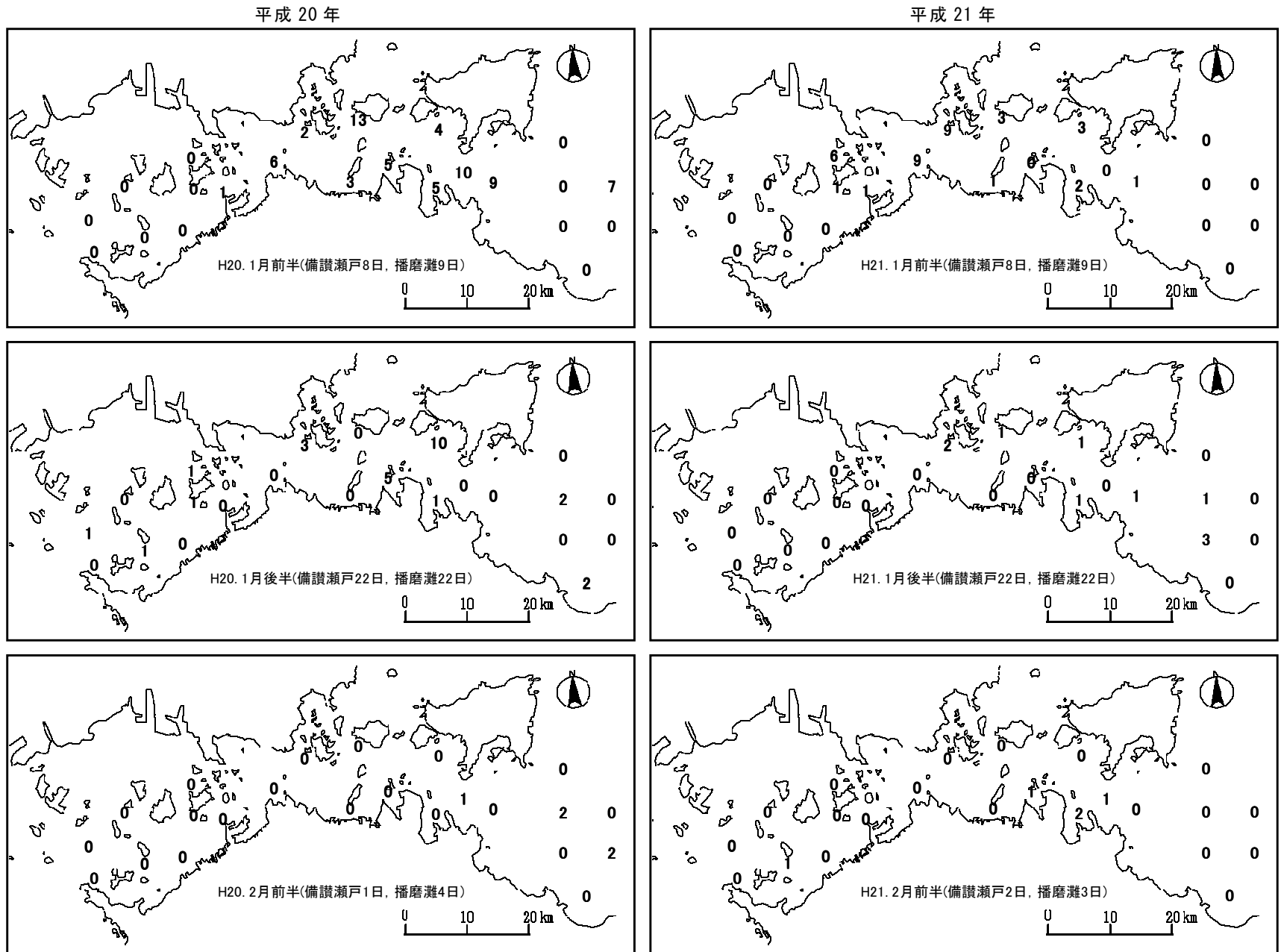
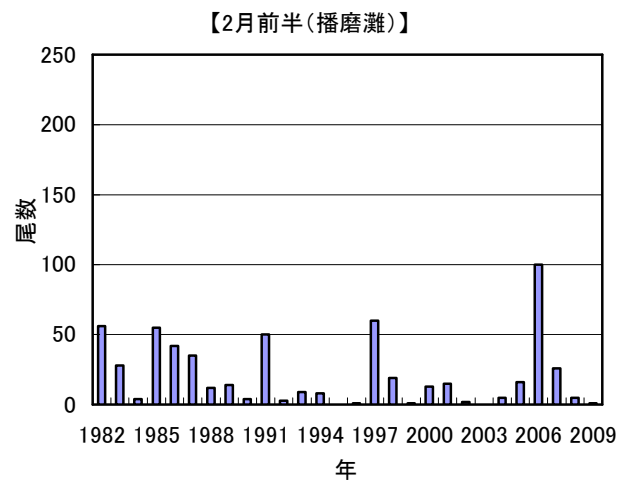
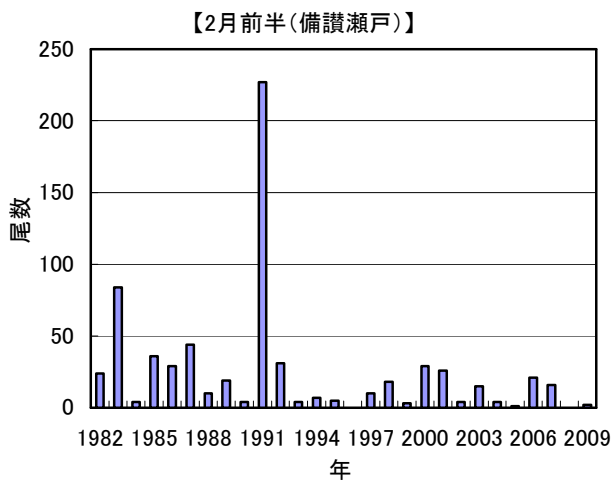
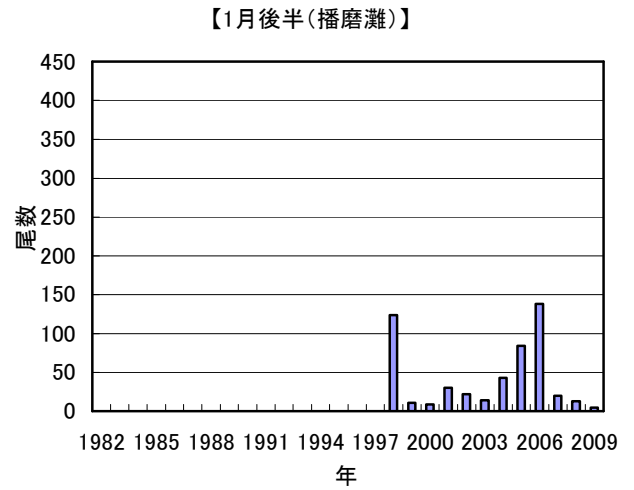
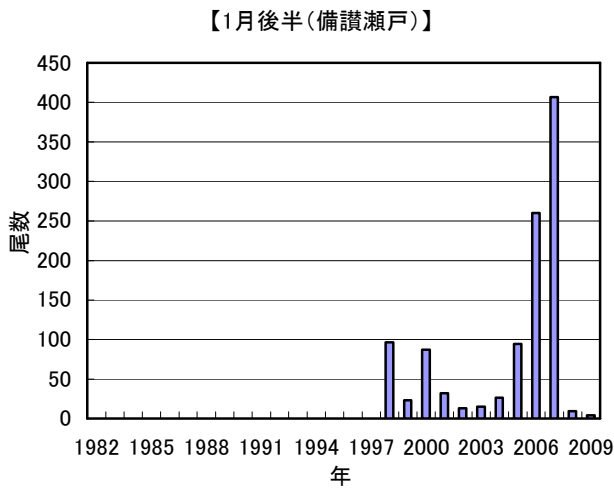
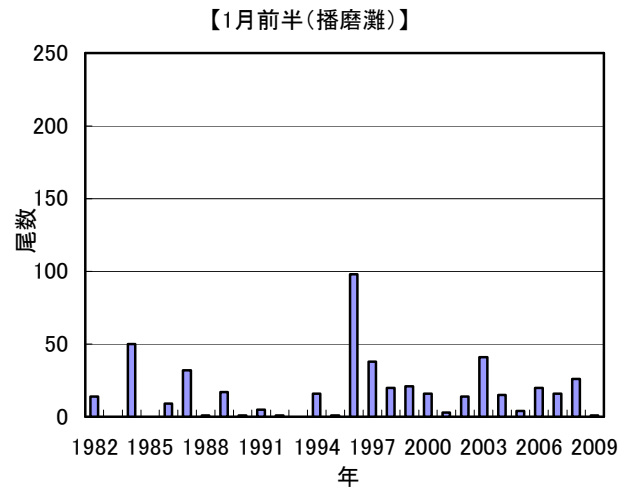
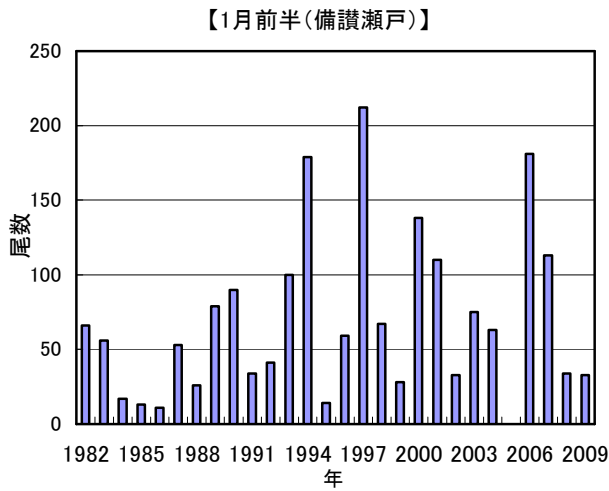


図5 イカナゴ稚仔魚の採集尾数(丸特Bネット一曳網あたり)



備讃瀬戸: 調査点14点の合計
播磨灘: 調査点7点の合計

図6 イカナゴ稚仔魚採集尾数の推移 (丸特Bネット一曳網あたり)

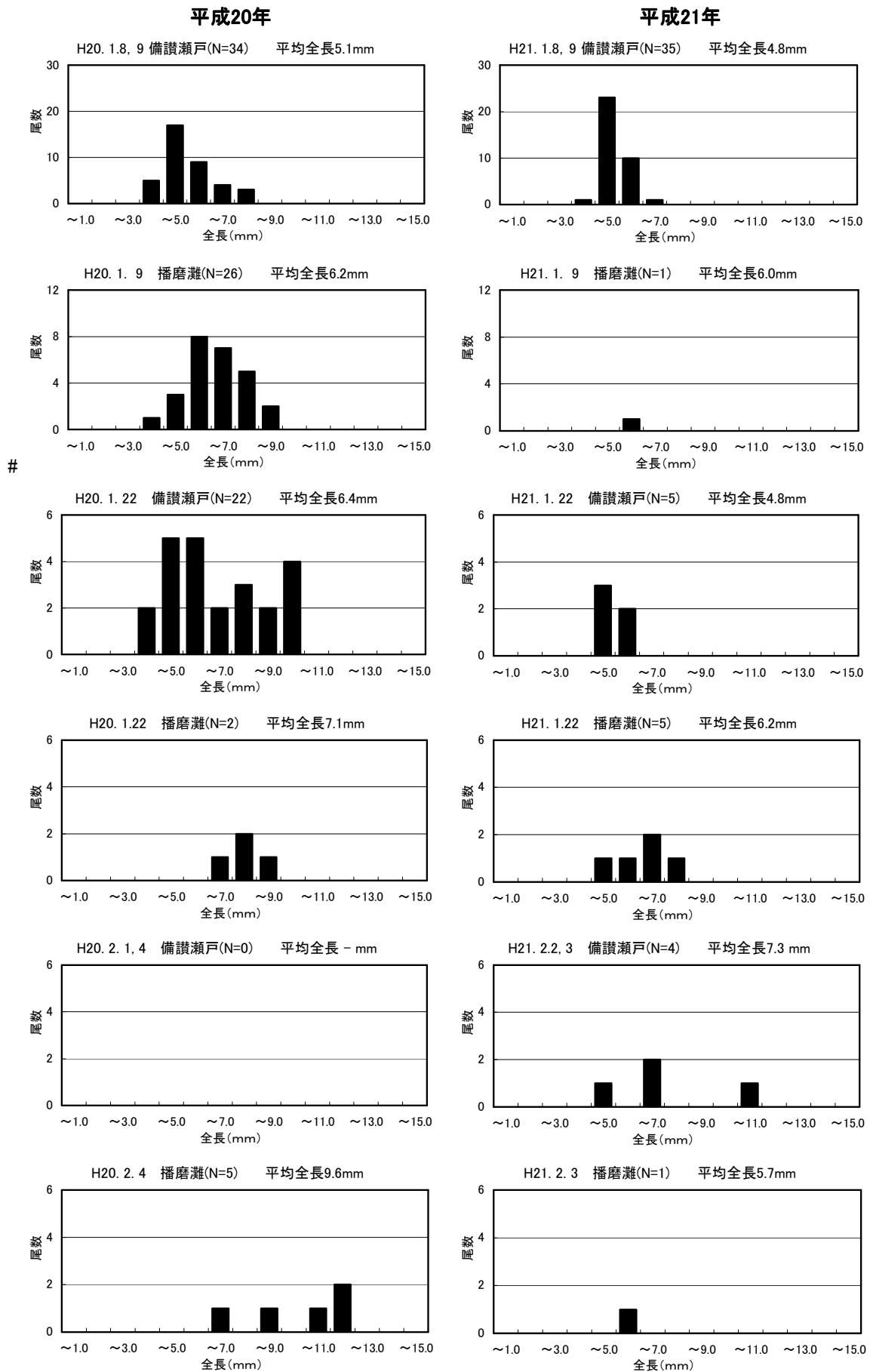


図7 イカナゴ稚仔魚の全長組成